論文

「つつじ花　にほへる君」「紫の　にほへる妹」「山吹の　にほへる妹」と萬葉人の色彩感覚

田中　みどり

〔抄　録〕

萬葉集の「つつじ花　にほへる（君）」（つつじの花が周囲の緑からとびだすような鮮烈な色であるように生き生きとした）「紫の　にほへる（妹）」（むらさきの花のように鮮やかに目にとびこんでくる）「山吹の　にほへる（妹）」（山吹の花のように目にまぶしい）などは、いずれも、「つつじ花」「紫草」「山吹」を「君」や「妹」の比喩に用いている。

当時、「黄ナル」色は、生成り色も含んだ茶系統の色であり（当時の分類で言えばアヲ系統）、「現在の黄色」にあてはまる色は「ヤマブキ色」であった。また、「白」は透明感を含んだ色であった。日本の古代色、アカ（明）・クロ（暗）・シロ（顕）・アヲ（漠）は、アカ・クロが明度を、シロ・アヲが彩度をあらわすものに他ならない。「シロ」という色彩語が「顕」の義をもつことが、いまだこの時代には実感として保たれていたのである。

キーワード　萬葉集、にほへる君、にほへる妹、色彩

本稿では、岩波新日本古典文学大系『萬葉集』（一九九九年～二〇〇三年）を底本とする。ただし、萬葉集の訓については、適宜、勘案する。以下、新日本古典文学大系を「新大系」と略す。なお、小学館新編日本古典文学全集（一九九四年～一九九六年）を「全集」、新潮日本古典集成（一九七六年～一九八四年）を「集成」と略す。

その他、小学館新編日本古典文学全集『古事記』（一九九七年）、小学館新編日本古典文学全集『日本書紀』（一九九四年～一九九八年）、岩波日本古典文學大系『古事記　祝詞』（一九五八年）、小学館新編日本古典文学全集『風土記』（一九九七年）、小学館新編日本古典文学全集『宇津保物語』（一九九九年～二〇〇二年）、岩波新日本古典文学大系『落窪物語』（一九八九年）、岩波新日本古典文学大系『源氏物語』（一九九三年～一九九七年）、岩波新日本古典文学大系『土佐日記　蜻蛉日記　紫式部日記　更級日記』（一九八九年）、勉誠社『尊經閣蔵　三巻本

色葉字類抄』（一九八四年）を用いた。
○印は歌・物語の本文、◎印は訳、◇は引用、※は筆者の考えをあらわす。

はじめに

萬葉集の中には、「つつじ花　にほへる君」「紫の　にほへる妹」「山吹の　にほへる妹」のように、よく似た形の表現がある。

○…いかにあらむ　年月日にか　つつじ花　香へる君が（茵花　香君之）
　にほ鳥の　なづさひ来むと…　［三・443　大伴宿祢三中］
○紫の　にほへる妹を　憎くあらば　人妻ゆゑに　吾恋ひめやも
　［一・21　大海人皇子］
○山吹の　にほへる妹が（山振之　尓保敝流妹之）　はねず色の　赤裳の姿
　夢に見えつつ　［十一・2786　寄物陳思］

この「つつじ花」「紫の」「山吹の」の解釈が、注釈書によっても異なり、また、同じ注釈書の中での扱いもそれぞれ異なっている場合がある。以下に、集成と全集と新大系の訳および注を並べて掲げる。

443歌「つつじ花　にほへる君が」について

集成訳　◎元気なあなたが
　注　◇つつじ花　「にほふ」の枕詞。
　　にほへる君　うるわしく元気な君。
全集訳　◎（つつじ花）明るい顔で
　注　◇つつじ花―ニホフの枕詞。
　　にほへる→二一。原文「香」は色が発散する見た目の美しさの他に香りの良さをも含めた用字。竜麻呂が若かったことを示す。
新大系訳　◎（つつじ花）紅顔の芳しい君が
　注　（注はなし）

いずれも、「つつじ花」を「ニホフ」の枕詞としている。

21歌「紫の　にほへる妹を」

集成訳　◎むらさきのように美しいあなたが
　注　◇紫草の　「にほふ」の枕詞。前歌の「あかねさす」に対し、同じく前歌中の草の名を用いたもの。
　　にほへる　「にほふ」は赤い色が美しく照り映える意。女性の紅顔の形容に用いた例が三四二七にもある。
全集訳　◎紫草のように　におうあなたを
　注　◇にほへる妹―ニホフは花や女の容姿の（主として赤系統に）照り映えることをいう。額田王をさす。
新大系訳　◎紫草のように美しいあなたを
　注　◇「答えの歌には、前の歌の詞句を取ることが普通であるので、ここでも紫草の句を受けてゐる。然し、前のは草の名をいひ、この歌では紫の色を指してゐる」（武田祐吉『総釈』）。
　　「にほへる妹」は、赤く照り映える妹。紅顔の美貌を言う。

集成では「紫草の」を「ニホフ」の枕詞としているが、訳は「むらさきのように美しい」と比喩になっている。全集・新大系は「紫草のように　におう」「紫草のように美しい」と、「紫の」は比喩表現とする。新大系の注には『総釈』の「紫の色」説を挙げていて、これを支持しているようである。（→後述〈二〉）

2786歌「山吹の　にほへる妹が」

集成訳　◎山吹の花が咲いたようにあでやかな娘、その娘の
　注　◇山吹の　「にほふ」の枕詞。
　　にほへる　「にほふ」は色が美しく照り映える意。ここは容貌の美しさを言う。
全集訳　◎山吹の花のように　美しいあの娘の

注　◇山吹―ばら科の落葉低木。春、濃黄色の花を開く。
にほへる妹が―このニホフは女性の容貌の輝くばかりに美しいことをいう。

新大系訳　◎山吹の花のように美しい妹の

注　◇初句「山吹の」は、枕詞と見ることもできる。「にほふ」は女性の美しさを表す語。「紫のにほへる妹」（二一一）、「つつじ花にほへる君」（四四三）。

集成では「山吹の」を「ニホフ」の枕詞としているが、訳は「山吹の花が咲いたようにあでやかな」と比喩になっている。全集・新大系は「山吹の花のように美しい」と訳していて、「山吹の」は比喩表現とする。ただ、新大系の注には、〈初句「山吹の」は、枕詞と見ることもできる〉と言っている。

ここで問題になるのは、

・「つつじ花」「紫の」「山吹の」が「ニホフ」の枕詞であるかどうか。

・紫が花であるか色であるか

の二点である。これを考えるにあたって、まず、「ニホフ」を整理する。

一　ニホフ

ニホフは、

○あをによし　奈良の都は　咲く花の　薫ふがごとく（咲花乃　薫如）　今盛りなり　［三・328　大宰少弐小野老朝臣］

のように、咲く花の色香を賞でることばであり、とりわけ、

○春の園　紅にほふ（紅尓保布）　桃の花　下照る道に　出で立つをとめ　［十九・4139　家持］

「花」が艶やかに咲く様子をあらわすものや、

○…春されば　花咲きををり　秋されば　もみち葉にほひ（黄葉尓保比）…　［十七・3907　右馬頭境部宿祢老麻呂］

「もみち葉」が赤や黄に明るく鮮やかに燃える様子をあらわすもの、に用いられる。

「赤系統の花」や「もみち」「紅の衣」「紅顔」などの色が発する場合に用いることが多く、また、「丹穂経」などの用字のものもあり、本来、赤色が発することを言う語であったと考えられている。ただ、白色や黄色の例も少なくはなく、萬葉集の時代には、広く、色が発すること、染まることを言う語となっている。「朝日影」のように明るい光を発することをあらわすこととともなり、人の「輝くように美しい様」をあらわす語ともなる。「橘のにほへる香」のように明らかに香に用いているものもある。

ニホフ

色を発する　秋山（朝露に）・神山（露霜に）・山の木末・花4・花（朝露に）・咲く花・春の花・梅・桃の花（紅）・あしびの花・櫻花・丹つつじ・卯の花・萩・萩の花・秋の葉・もみち葉・黄葉（朝露に）・榛原

色が映える　山川（白たへ）・黒牛の海（紅）・神奈備（紅）・雄神川（紅娘子）・多胡の浦の底（藤波に）

色を移す　白つつじ（われに）
色に染まる　白たへ衣（もみつ山に）・われ（榛に）3・作者（萩に）・作者（黄土に）2・　作者（砂に）・作者（秋萩に）・人（萩に）・袖（をみなへしに）・仮廬の宿り（秋萩に）・裳（秋萩に）・衣（秋つ葉に）
発色する　紅の赤裳の裾（春雨に）
発現する　紅の濃染めの衣・紅の衣
明るい光　朝日影
紅顔　面輪（桃の花　紅色）
美しい　児
人に染まる　われ（翁の心に）
匂い立つ　花橘2・橘2
潑剌　つつじ花
比喩　山吹の・紫の
ニホハス　梅の花（白妙に）・黄葉・萩・黄土・紅の衣・衣
ニホヒ　桜の花・秋の葉・もみち葉2・秋萩・榛・紅に染めてし衣・娘子らが笑まひ

現在、奈良県宇陀の地から三重県青山にかけての山間部には、桜・躑躅・藤などが自生しているのが見られる。緑の中からとびだしたように、薄紅や白や藤色の花が、木々の間に鮮やかに姿をあらわす。その生き生きした様を描写するのがニホフである。

○馬並めて　高の山辺を　白たへに　にほはしたるは（白妙丹　令艶色有者）　梅の花かも　［十・1859　春の雑歌］

では、白梅の美しい色が際立つ様子をあらわしている。

○たくひれの　鷺坂山の　白つつじ　われにほはね（白菅自　吾尓尼保波尼）　妹に示さむ　［九・1694　雑歌］

は、「白つつじ」の白い色が鮮明にとらえられ、その色が自分に染まることを願うものである。家の妻に白つつじの美しさを何とか伝えたい、という思いである。

○吾が背子が　白たへ衣　行き触れば　にほひぬべくも　もみつ山かも（応染毛　黄変山可聞）　［十・2192　秋の雑歌］

では、黄変した山の色に白い衣が染まってしまいそうだ、と言い（「もみつ」の字面は「黄変」であるが、黄色か紅色かはわからない）、

○ことさらに　衣は摺らじ　をみなへし　佐紀野の萩に　にほひて居らむ（芽子尓　丹穂日而将居）　［十・2107　秋の雑歌］

では、わざわざ衣を摺ることなく、萩の色に染まって居よう、と言う。これは、萩の花の近くに居れば、自然と萩の花に色が染まるだろう、と言って、萩の花の美しさを賞でているものである。

○白波の　千重に来寄する　住吉の　岸の黄土に　にほひて行かな（岸乃黄土粉　二宝比天由香名）　［六・932　車持朝臣千年］

○玉津島　磯の浦廻の　砂にも　にほひて行かな（真名子仁文　尓保比弖去名）　妹も触れけむ　［九・1799　挽歌］

など、「黄土」や「砂」に染まることを願うものもある。「黄土」は染色材料となるものである。これは、実際に黄土で染色をするわけではないが、それに染まって行こうと詠むことによって、住吉の土地を賞めたものである。「砂」は染色材料ではないが、砂色が美しいものであったのかもしれない。そうでなくとも、亡き妻のゆかりのものであるならば砂でさえ、触れることによって染まりたいという、切ない思いである。

○引馬野に　にほふ榛原　入り乱れ　衣にほはせ（衣尓保波勢）　旅のしる

しに　　［一・57　長忌寸奥麻呂］

「榛」も同じく染色材料である。また、

○紅の　衣にほはし（紅乃　衣尓保波之）　辟田川　絶ゆることなく　吾等かへり見む　　［十九・4157　家持］

は、

○…吾妹子が　形見がてらと　紅の　八入に染めて　おこせたる　衣の裾も通りて濡れぬ　　［十九・4156　家持］

の反歌であって、妻が紅花で濃い紅に染めてくれた衣が水に濡れて、より色濃く鮮明になる様子を歌っている。

※　新大系注には、〈長歌の末尾の「通りて濡れぬ」を受けて、紅の衣を川の水に濡らして色鮮やかに染めることを「紅の衣にほはし」と言うのだろう。〉とあるが、全集注に、〈このニホハスは赤く染める意。衣が水に潰って一層派手になったことを家持を自ら主語にして言った。〉とあるのが良い。

この場合は、染色ではなく、その色を一層鮮やかに発色させることをニホハスと言っている。

○紅に　染めてし衣（紅尓　染而之衣）　雨降りて　にほひはすとも（雨零而　尓保比波雖為）　移ろはめやも（移波米也毛）　　［十六・3877　雑歌］

の場合も、雨が染め色を退色させるのではなく、発色させることを詠み（ニホフとウツロフが対比されている）、

○妻隠る　矢野の神山　露霜に　にほひそめたり（露霜尓　尓宝比始）　散らまくも惜し　　［十・2178　秋の雑歌］

では、山（の木々）の色が露霜によって色づく、と言う。

○多胡の浦の　底さへにほふ　藤波を（底左倍尓保布　藤奈美乎）　かざして行かむ　見ぬ人のため　　［十九・4200　内蔵忌寸縄麻呂］

は、藤の花が水に映って、水底にまでも藤の花が咲いているかのような情景を詠んでいる。そのニホフで人を比喩するとき、それは潑剌とした健やかな様子をあらわすことになる。

○桃の花　紅色に　にほひたる　面輪の内に（桃花　紅色尓　ゝ保比多流面輪乃宇知尓）…　　［十九・4192　家持］

は紅顔の美しさを「桃の花」の「紅色」で比喩しており、

○筑紫なる　にほふ児ゆゑに（尓抱布児由恵尓）　陸奥の　香取娘子の　結ひし紐解く　　［十四・3427　東歌］

は、「輝くような美しさ」をあらわすことばになりおおせている。

○住吉の　岸野の榛に　にほふれど（岸野之榛丹　ゝ穂所経跡）　にほはぬ我や（丹穂葉寐我八）　にほひて居らむ（丹穂氷而将居）　　［十六・3801　竹取翁歌］

は「竹取翁」の歌群の一首で、

◎住吉の岸野の榛で染め付けるけれども、色のよく染まらない私が翁の心には染まっているだろうか。

の意。「にほひて居らむ」の「ニホフ」は「翁の心に染まる」の意で、「榛に染まる」ことよりもさらに抽象的な内容となっている。

また、

○朝日影　にほへる山に（朝日影　尓保敝流山尓）　照る月の　飽かざる君を　山越しに置きて　　［四・495　田部忌寸櫟子］

では、朝日の光が輝く様にニホフを用い、

○橘の　にほへる香かも（橘乃　尓保敝流香可聞）　ほととぎす　鳴く夜の

雨に　うつろひぬらむ　［十七・3916　大伴宿祢家持］

では、かぐわしい香にもニホフを用いている。

二　「つつじ花　にほへる君」「紫の　にほへる妹」「山吹の　にほへる妹」

ここで、〈はじめに〉に挙げた

・「つつじ花」「紫の」「山吹の」が「ニホフ」の枕詞であるかどうか。

を考える。

集成は3首とも枕詞としている。全集は「つつじ花」を枕詞、新大系は「つつじ花」を枕詞、「山吹の」は枕詞と見ることもできる、としている。集成は3首とも枕詞としているが、その訳は「元気なあなたが」「むらさきのように美しいあなたが」「山吹の花が咲いたようにあでやかな娘、その娘の」である。枕詞とあるが、「紫の」「山吹の」の訳は比喩である。「つつじ花」については、集成・全集・新大系すべて枕詞としている。

これら三つの花について、萬葉集でどのようにとらえられているかを見る。

ツツジは萬葉集中に9首ある。［二・185　七・1188　三・434　九・1694　十・1905　六・971　十三・3305　十三・3309　三・443］

①水伝ふ　磯の浦廻の　石つつじ（石上乍自）　もく咲く道を　またも見むかも　［二・185　挽歌］

②山越えて　遠津の浜の　岩つつじ（石管自）　吾が来るまでに　含みてあり待て　［七・1188　羇旅作］

③風早の　美保の浦廻の　白つつじ（白管仕）　見れどもさぶし　なき人思へば　［三・434　河辺宮人］

④たくひれの　鷺坂山の　白つつじ（白管自）　吾ににほはね　妹にしめさむ　［九・1694　雑歌］

⑤をみなへし　佐紀野に生ふる　白つつじ（白管自）　知らぬこともて　言はれし吾が背　［十・1905　春の相聞］

⑥…丹つつじの　にほはむ時の（丹管士乃　将薫時能）　桜花　咲きなむ時に…　［六・971　高橋連虫麻呂］

⑦…つつじ花　にほえ娘子（茵花　香未通女）　桜花　栄え娘子　汝をそも　吾に寄すといふ　吾をもそ　汝に寄すといふ…　［十三・3305　問答］

⑧…つつじ花　にほえ娘子（都追慈花　尓太遙越売）　桜花　栄え娘子　汝をそも　吾に寄すといふ　吾をそも　汝に寄すといふ…　［十三・3309　問答］

⑨…つつじ花　にほへる君が（茵花　香君之）　にほ鳥の　なづさひ来むと…　［三・443　挽歌］

①「水伝ふ　磯の浦廻の　石つつじ（石上乍自）」②「遠津の浜の　岩つつじ（石管自）」③「風早の　美保の浦廻の　白つつじ（白管仕）」④「たくひれの鷺坂山の　白つつじ（白管自）」⑥「…丹つつじの　にほはむ時の（丹管士乃　将薫時能）　桜花　咲きなむ時に…」はつつじの花。

⑤をみなへし　佐紀野に生ふる　白つつじ（白管自）　知らぬこともて　言はれし吾が背　［十・1905　春の相聞］

は「をみなへし」が「さき」の枕詞、「をみなへし　佐紀野に生ふる白つつじ」が「知ら」の序詞である。「白つつじ」はつつじの花をあ

らわしている。

⑦…つつじ花　にほえ娘子（茵花　香未通女）　桜花　栄え娘子　汝をそも
　吾に寄すといふ　吾をもそ　汝に寄すといふ…
［十三・3305　問答］

の「つつじ花」は、集成は枕詞、全集は比喩と注する。

⑧…つつじ花　にほえ娘子（都追慈花　尓太遙越売）　桜花　栄え娘子　汝
　をそも　吾に寄すといふ　吾をそも　汝に寄すといふ…
［十三・3309　問答］

は⑦十三・3305の類歌であるので、⑦に同じ。

3305集成注　◇つつじ花　「にほへ娘子」の枕詞。
3305全集注　◇つつじ花―ニホヘ娘子の比喩。

新大系に注はないが、訳では3305「ツツジの花のように色美しい娘子」3309「ツツジ花のように色美しい娘子」と、比喩になっている。これが比喩であるとするならば、

⑨…つつじ花　にほへる君が（茵花　香君之）　にほ鳥の　なづさひ来むと
　…
［三・443　挽歌］

「つつじ花　にほへる君が」の「つつじ花」も比喩と考えてよい。

443集成訳　◎元気なあなたが
　注　◇つつじ花　「にほふ」の枕詞。
　　にほへる君　うるわしく元気な君。
443全集訳　◎（つつじ花）明るい顔で
　注　◇つつじ花―ニホフの枕詞。
　　にほへる↓二一。原文「香」は色が発散する見た目の美しさの他に香りの良さをも含めた用字。竜麻呂が若かったことを示す。

443新大系訳　◎（つつじ花）紅顔の芳しい君が
　注　（注はなし）

若者の清新な美しさを「つつじの花」でもって比喩したものである。なお、ここに「白つつじ」と「丹つつじ」があることに注意しておきたい。

※躑躅の花の色は、紅い躑躅も白い躑躅も鮮烈な色である。

紫は、萬葉集中に16首あり、そのうち、色をあらわすもの7例［四・569　七・1340　十二・2974　十二・2976　十二・2993　十二・3101　十六・3791］

①韓人の　衣染むといふ　紫の　心に染みて（紫之　情尓染而）　思ほゆるかも
［四・569　大典麻田連陽春］
②紫の（紫）　糸をそ吾が搓る　あしひきの　山橘を　貫かむと思ひて
［七・1340　譬喩歌］
③紫の（紫）　帯の結びも　解きも見ず　もとなや妹に　恋ひわたりなむ
［十二・2974　寄物陳思］
④紫の（紫）　我が下紐の　色に出でず　恋ひかも痩せむ　逢ふよしをなみ
［十二・2976　寄物陳思］
⑤紫の（紫）　まだらの縵　はなやかに　今日見し人に　後恋ひむかも
［十二・2993　寄物陳思］
⑥紫は（紫者）　灰さすものそ　海石榴市の　八十の衢に　逢へる児や誰
［十二・3101　問答歌］
⑦…さ丹つかふ　色なつかしき　紫の（紫之）　大綾の衣…
［十六・3791　竹取翁歌］

紫草をあらわすもの5例［三・395　十・1825　十四・3500　十二・3099　一・21］

⑧託馬野に　生ふる紫草（生流紫）　衣に染め　いまだ着ずして　色に出でにけり　［三・395　譬喩歌］

⑨紫草の（紫之）　根延ふ横野の　春野には　君をかけつつ　うぐひす鳴くも　［十・1825　春の雑歌］

⑩紫草は（牟良佐伎波）　根をかも終ふる　人の児の　うらがなしけを　寝を終へなくに　［十四・3500　東歌］

⑪紫草を（紫草乎）　草と別く別く　伏す鹿の　野は異にして　心は同じ　［十二・3099　寄物陳思］

⑫紫の（紫草能）　にほへる妹を　憎くあらば　人妻ゆゑに　吾恋ひめやも　［一・21　大海人皇子］

枕詞4例［十六・3870　七・1392　七・1396　十一・2780］

⑬紫の（紫乃）　粉潟の海に　潜く鳥　玉潜き出ば　吾が玉にせむ　［十六・3870　有由縁］

⑭紫の（紫之）　名高の浦の　砂地　袖のみ濡れて　寝ずかなりなむ　［七・1392　譬喩歌］

⑮紫の（紫之）　名高の浦の　なのりその　磯になびかむ　時待つ吾を　［七・1396　譬喩歌］

⑯紫の（紫之）　名高の浦の　なびき藻の　心は妹に　寄りにしものを　［十一・2780　寄物陳思］

その用字は、色をあらわすものは［四・569　紫］［七・1340　紫］［十二・2974　紫］［十二・2976　紫］［十二・2993　紫］［十二・3101　紫］［十六・3791　紫］で、すべて「紫」。紫草をあらわすものは［三・395　紫］［十・1825　紫］［十四・3500　牟良佐伎］［十二・3099　紫草］［一・21　紫草］。枕詞は［十六・3870　紫］［七・1392　紫］［七・1396　紫］［十一・2780　紫］で、すべて「紫」。つまり、紫草を表すものの用字のみ「紫」「紫草」「牟良佐伎」がある、ということである。

このうち、

○紫の（紫草能）　にほへる妹を　憎くあらば　人妻ゆゑに　吾恋ひめやも　［一・21］

の「紫草」は、色を指すものであるという説もある（總釋）。

武田祐吉『萬葉集總釋』（一九三五年）巻第一　四九頁～五〇頁　【後記】

◇答えの歌には、前の歌の詞句を取ることが普通であるので、ここでも、紫草の句を受けてゐる。然し前のは草の名をいひ、この歌では紫の色を指してゐる。其處に相違変化があるのである。

「むらさき」が「にほふ」のは、植物でも色でもあり得るが、用字は、色を指しているもの7例すべて「紫」、枕詞4例すべて「紫」であるのに対し、植物をあらわすものは、「紫」2例、萬葉仮名1例、「紫草」2例であり、ここでは「紫草」になっている。武田祐吉は20歌は「草の名」、21歌は「紫の色」としているが、20歌は、

○あかねさす　紫野行き（武良前野逝）　標野行き　野守は見ずや　君が袖振る　［一・20　額田王］

で、「紫（野）」の用字は「武良前（野）」と、「草」文字を用いていない。それに対して21歌の用字は「紫草」である。このことは、21歌の「むらさき」が植物であることを示すための用字であろうと考える。『評釋萬葉集』（佐々木信綱　一九四八年）の、

◇紫草のにほへる妹を　この紫草を單に紫色と解する説もあるが、紫草の花の咲き匂ふ如くつややかに美しい妹をと解すべきであらう。

に同意する。紫草の花は、白い小さな花である。美しい妹をそんな可

憐な花にたとえたのが、この歌である。すなわち、この「むらさきの」は比喩表現ということになる。

やまぶき（山吹）は17首ある。[二・158　八・1444　十九・4185　十九・4186　十九・4197　二十・4303　十七・3971　十七・3968　二十・4302　十七・3974　十七・3976　八・1435　十・1860　十九・4184　二十・4304　十・1907　十一・2786]

①山吹の（山振之）　立ちよそひたる　山清水　汲みに行かめど　道の知らなく　[二・158　高市皇子尊]

②山吹の（山振之）　咲きたる野辺の　つほすみれ　この春の雨に　盛りなりけり　[八・1444　高田女王]

③…繁山の　谷辺に生ふる　山吹を（山振乎）　やどに引き植ゑて…　[十九・4185　家持]

④山吹を（山吹乎）　やどに植ゑては　見るごとに　思ひは止まず　恋こそまされ　[十九・4186　家持]

⑤妹に似る　草と見しより　吾が標めし　野辺の山吹（野辺之山吹）　誰か手折りし　[十九・4197　家持]

⑥わが背子が　やどの山吹（夜度乃也麻夫伎）　咲きてあらば　止まず通はむ　いや年のはに　[二十・4303　大伴宿祢家持]

⑦山吹の（夜摩扶枳能）　繁み飛び潜く　うぐひすの　声を聞くらむ　君はともしも　[十七・3971　大伴宿祢家持]

⑧うぐひすの　来鳴く山吹（伎奈久夜麻夫伎）　うたがたも　君が手触れず　花散らめやも　[十七・3968　掾大伴宿祢池主]

⑨山吹は（夜麻夫伎波）　撫でつつ生ほさむ　ありつつも　君来ましつつ　かざしたりけり　[二十・4302　置始連長谷]

⑩山吹は（夜麻夫枳波）　日に日に咲きぬ　愛しと　あが思ふ君は　しくしく思ほゆ　[十七・3974　大伴宿祢池主]

⑪咲けりとも　知らずしあらば　黙もあらむ　この山吹を（己能夜万夫吉乎）　見せつつもとな　[十七・3976　大伴宿祢家持]

⑫かはづ鳴く　神奈備川に　影見えて　今か咲くらむ　山振の花（山振乃花）　[八・1435　厚見王]

⑬花咲きて　実は成らねども　長き日に　思ほゆるかも　山振の花（山振之花）　[十・1860　春の雑歌]

⑭山吹の（山吹乃）　花とり持ちて　つれもなく　離れにし妹を　偲ひつるかも　[十九・4184　留女之女郎]

⑮山吹の（夜麻夫伎乃）　花の盛りに　かくのごと　君を見まくは　千歳にもがも　[二十・4304　少納言大伴宿祢家持]

⑯かくしあらば　なにか植ゑけむ　山吹の（山振之）　止む時もなく　恋ふらく思へば　[十・1907　春の相聞]

⑰山吹の（山振之）　にほへる妹が　はねず色の　赤裳の姿　夢に見えつつ　[十一・2786　寄物陳思]

このうち、⑯十・1907　⑰十一・2786　をのぞく15首は、山吹の花を詠んだものである。

⑯かくしあらば　なにか植ゑけむ　山吹の（山振之）　止む時もなく　恋ふらく思へば　[十・1907　春の相聞]

は山吹の花でありつつ、「山吹の」が「止む時もなく」を引き出す序となっており、

⑰山吹の（山振之）　にほへる妹が　はねず色の　赤裳の姿　夢に見えつつ　[十一・2786　寄物陳思]

は、美しい妹の様子を「山吹のように」と「山吹」で比喩している。

〈一　ニホフ〉に掲げた

○春の園　紅にほふ　桃の花　下照る道に　出で立つをとめ
［十九・4139］

では、紅に色づき咲いているのは、桃の花であった。しかし、

○黒牛の海　紅にほふ　ももしきの　大宮人し　あさりすらしも
［七・1218］

では、官女たちの赤裳の色が、紅に海を染め、

○紅に　染めてし衣　雨降りて　にほひはすとも　移ろはめやも
［十六・3877］

では、紅に染めた衣が、雨に濡れて色を増す。

○桃の花　紅色に　にほひたる　面輪の内に　青柳の　細き眉根を　笑み曲がり　朝影見つつ　をとめらが…
［十九・4192］

は、右の4139歌と同じく、桃の花が紅色に咲き匂っているのを詠むが、それは「をとめら」の紅色に輝く顔を比喩することばとなっている。これに類する例が、

○…つつじ花　にほへる君が　にほ鳥の　なづさひ来むと…
［三・443］

○紫の　にほへる妹を　憎くあらば　人妻ゆゑに　吾恋ひめやも
［一・21］

○山吹の　にほへる妹が　はねず色の　赤裳の姿　夢に見えつつ
［十一・2786］

の「つつじ花　にほへる（君）」（つつじの花が周囲の緑からとびだすような鮮烈な色であるように生き生きとした）「紫の　にほへる（妹）」（むらさきの花のように鮮やかに目にとびこんでくる）「山吹の　にほへる（妹）」（山吹の花のように目にまぶしい）である。いずれも、「つつじ花」「紫草」「山吹」を「君」や「妹」の比喩に用いているのである。

三　やまぶき色

山吹の例の中に、

十市皇女の薨ぜし時、高市皇子尊の御作りたまひし歌三首

○山吹の（山振之）　立ちよそひたる　山清水　汲みに行かめど　道の知らなく
［二・158］

紀に曰く、「七年戊寅の夏四月丁亥の朔の癸巳、十市皇女卒然として病発りて宮の中に薨じき」といふ。

がある。集成注に、

◇黄泉の国まで逢いに行きたいという歌。山吹に「黄泉」の「黄」を、山清水に「泉」をにおわす。

と、あり、全集注にも、

◇山吹の立ちよそひたる山清水―ヤマブキは晩春咲くばら科の落葉低木。原文「山振」は、振り回すことをフクといったので借りた表記。ヨソフは飾り付けること。死後の世界を意味する中国の「黄泉」の語を意訳して黄色い山吹と清水とで表している。

と言う。平安期の宇津保物語や源氏物語に、「黄なる泉」の用例

○苔生ふる　岩に千代経る　命をば　黄なる泉の　水ぞ知るらむ
［宇津保物語　藤原の君　①一四八頁］

○…うつし人になりて、末の世には黄なる泉のほとりばかりを、おのづから語らひ寄る風の紛れもありなん、…　［源氏物語　手習　⑤三八五頁］

があり、平安時代には「黄泉」をこのように訓読することがあったこ

とがわかる。十市皇女の薨去は天武天皇七年（六七八年）のことであるから、宇津保物語の成立より三百年も前のことである。そして、「黄なる泉」という訓読よりも高市皇子の歌のほうが何層倍も詩情をたたえている。高市皇子の歌が「黄泉」を意識したものであるとするならば、源氏物語などには承け継がれていてほしい表現である。ただし、源氏物語絵合の帖に竹取物語と宇津保物語とを争わせているほどに、源氏物語の作者は宇津保物語を高く評価していたから、「黄なる泉」の表現は宇津保物語の影響によるものであるかもしれない。

次に、新大系の注には、

◇「山吹」は、水辺に自生し、晩春初夏の候、黄色い花が咲く。皇女の死んだのは夏四月。山吹の掩いかぶさるように咲き乱れる清水を求めて、山中奥深く入って行った十市皇女を自分も追って行きたい、しかし道が分からない。後出「秋山の黄葉をしげみ惑ひぬる妹を求めむ山道知らずも」（二〇八）にも似た絶望的な追慕の情である。

とある。萬葉集の中には、

○秋山の　黄葉をしげみ（黄葉乎茂）　惑ひぬる　妹を求めむ　山道知らずも　［二・208　挽歌　柿本人麻呂］

のように、黄葉を死と結び付けた歌がいくつか見られる。

○…沖つ藻の　なびきし妹は　黄葉の　過ぎて去にきと（黄葉乃　過伊去等）　玉梓の　使ひの言へば…　［二・207　柿本人麻呂］

○見れど飽かず　いましし君が　黄葉の　移りい行けば（黄葉乃　移伊去者）　悲しくもあるか　［三・459　聖武天皇］

○もみち葉の　過ぎにし児らと（黄葉之　過去子等）　携はり　遊びし磯を　見れば悲しも　［九・1796　挽歌］

○…黄葉の　過ぎて去にきと（黄葉　過行跡）　玉梓の　使ひの言へば…　［十三・3344　挽歌］

これらは、人が亡くなることを、モミチが散り過ぎることで比喩している。これを含め、モミチ・モミツはほとんどすべて「黄葉」の用字で表記されている。[1] これは、中国のモミチが黄葉であることが多いゆえに、中国では「黄葉」の用字が多いことを受け継いだものである。[2]

また、「黄泉」を詠んだ歌もある。

○…神のむた　争ひかねて　葦原の　瑞穂の国に　家なやみ　また帰り来ぬ　遠つ国　黄泉の境に（遠津国　黄泉乃界丹）　延ふたつの　己が向き向き　天雲の　別れし行けば…　［九・1804　挽歌］

○…ししくしろ　黄泉に待たむと（宍串呂　黄泉尓将待跡）　隠り沼の　下延へ置きて　うち嘆き　妹が去ぬれば…　［九・1809　挽歌　高橋連虫麻呂］

日本書紀神代上第五段一書第六に「黄泉」があり、日本古典文学全集『日本書紀』の注に、

◇死者の住む所、あの世。「黄泉」はもと地下の泉の意（『左伝』隠公元年の杜預注に「地中ノ泉故ニ黄泉ト曰フ」）。「黄」は五行説に基づき、土を示す。　［日本書紀①44頁］

とあり、その他、ヨモツヒラサカなどを「泉津平坂」のように「黄」を入れずに「泉」だけの表記をしている例がある。[3] この場合「黄」は「土」を示すが、五行説の色では「黄色」である。「黄葉」の場合も「黄泉」の場合も、「黄」は中国の慣習や思想にしたがった表記であって、[4] 実際に日本での色彩名「黄色」を意識した用字ではない。

新大系紫式部日記に「黄」の例があるが、

○…世におもしろき菊の根をたづねつゝ掘りてまい〈ゐ〉る。色〳〵うつろひたるも、黄なるが見どころあるも、さま〴〵に植へ〈ゑ〉たてたるも、朝霧の絶え間に見わたしたるは、げに老ひ〈い〉もしぞきぬべき心ちするに…　［紫式部日記　新大系二七三頁］

○御まかなひ、橘の三位。青色の唐衣、唐綾の黄なる菊の袿ぞ、表着なんめる。　［紫式部日記　新大系二七七頁］

「菊の花」の色と「唐綾」の色である。日本の衣や玉の色として、新大系の源氏物語に、

○…黄なる生絹の単袴長く着なしたる童のお（を）かしげなる出で来て、うち招く。　［源氏物語　夕顔　①一〇一頁］

○…黄なる生絹の単衣、薄色なる裳着たる人の、扇うち使ひたるなど、用意あらむはや、とふと見えて、…　［源氏物語　蜻蛉　⑤二九九頁］

○白き色紙、青き表紙、黄なる玉の軸なり。　［源氏物語　絵合　②一七七頁］

などの「黄なる生絹」「黄なる玉」の用例があり、全集も3例とも「黄」の表記をしている。

生絹については、

○あさましくおぼえて、ともかくも思分かれず、やをら起き出でて、生絹なる単衣をひとつ着てすべり出でにけり。　［源氏物語　空蟬　①九十頁］

のような、色を記さない「生絹」の例もある。これは「生絹なる」とあるから、材質すなわち「生絹の糸で織った織物」の単衣を言う。蜻蛉日記にも

○三月つごもりがたに、かりの卵の見ゆるを「これ十づゝかさぬるわざを、いかでせん」とて、手まさぐりに、生絹の糸を長うむすびて、一つむすびては結ひ、〳〵してひき立てたれば、いとようかさなりたり。　［蜻蛉日記　新大系八三頁］

「生絹の糸」の用例がある。

○生衣　スゝシノキヌ　生絲　スゝシノイト　生　スゝシ　［色葉字類抄四七七頁、四七八頁］

また、落窪物語と枕草子に、

○いと濃きくれなゐの御はかま、白きすゞしの御ひとへ、うすものの〈ゝ〉なを〈ほ〉しを着て出ゐたまへるさま、いみじうなまめかしうきよげにおはす。　［落窪物語　第三　新大系一八六頁］

○…二藍の指貫に、あるかなきかの色したる香染の狩衣、白き生絹に、紅のとほすにこそはあらめ、つややかなる、霧にいたうしめりたるをぬぎ、…　［枕草子　三十四段　全集八四頁］

のように、「白きすゞし」の用例がある。[5]「生絹」は、精錬していない絹織物であるから、色は生成り色である。その色が白に近いものであったり黄色に近いものであったりしたことから、このように「白き生絹」と「黄なる生絹」とが併存することになったのであろう。

次に、絵合の「白き色紙、青なる表紙、きなる玉の軸なり」は、宇津保物語の物語絵（右方）の描写である。それに対する竹取物語の物語絵（左方）は「紙屋紙に唐の綺を褙して、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常のよそひなり」とある。

○右は、「かぐや姫の…」。絵は巨勢の相覧、手は紀貫之かけり。紙屋紙に唐の綺を褙して、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常のよそひなり。「俊蔭は、…」と言ふ。白き色紙、青き表紙、黄なる玉の軸なり。絵は常則、手は道風なれば、いまめかしうお〈を〉かしげに、目もかゝやくまで見ゆ。右はそのことは〈わ〉りなし。　［源氏物語　絵合　②一七六頁～一七七頁］

全集注に、

◇以下、左方が赤系統の、右方が青系統の色彩で対照的である。

［源氏物語　全集②三八二頁］

と言うのであるが、「白き色紙、青なる表紙、黄なる玉の軸なり」がなぜ青系統であるのか。新大系注には、

◇「白き色紙」の場合、「白」の着色の有無は未詳。

［源氏物語　②一七七頁］

とあるが、「白き色紙」は水に晒し灰汁で煮沸して得たものであろう。「黄なる玉」は、色彩を言うのであるならば赤系統に入る。しかし、これは「黄色」というほど鮮やかではない、黄ばんだ色の玉を言うものであろう。上の「黄なる生絹」が生成り色であったように、彩色していない玉を用いたものであると考える。とすれば、これはアヲ（漠）の範疇のものである。

すなわち「黄なる生絹」は「生成り色の生絹」、「黄なる玉」も「彩色してない玉」である。宇津保物語から「黄なる泉」の表現を取り入れはしたが、源氏物語において「黄」という色彩概念は一般的ではなかったのである。

それでは、現在いうところの「黄色」はどのようにあらわされているのであろうか。源氏物語には、

○…中に十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなへたる着て走り来たる女子、…　［源氏物語　若紫　①一五七頁］

○…御料とて人のたてまつれる御衣一くだり、葡萄染のを〈お〉り物の御衣、又山吹かなにぞいろ〳〵見えて、…　［源氏物語　末摘花　①二三一頁］

○…まばゆき色にはあらで、紅、紫、山吹の地のかぎりを〈お〉れる御小袿などを着たまへるさま、いみじういまめかしくお〈を〉かしげなり。

［源氏物語　紅葉賀　①二四七頁］

○童は、青色にすわ〈は〉うの汗衫、唐綾の表の袴、袒は山吹なる唐の綺を、おなじさまにとゝのへたり。　［源氏物語　若紫下　③三三四頁］

○桜の細長、山吹などの、お〈を〉りに合ひたる色あひの、なつかしきほどに重なりたる裾まで、あひ〈い〉ぎやうのこぼれ落ちたるやうに見ゆる、…　［源氏物語　竹河　④二六四頁］

○山吹、薄色などはなやかなる色あひに、御顔はことさらに染めにほはしたらむやうに、いとお〈を〉かしくはなばなとして、いさゝか物思ふべきさまもし給へらず。　［源氏物語　総角　④四四七頁］

など、白、紅、紫などと並んで「やまぶき」が用いられており、「ヤマブキ」が「黄色」の色彩名となっている。その他、「山吹襲」もある。これは表が薄朽葉で裏が黄の衣である。(6)

すなわち、源氏物語においては、「黄ナル」色とは生成りの色をさし、「現代の黄色」にあてはまるのは「ヤマブキ」色であることがわかる。当時、「黄ナル」色は、生成り色も含んだ茶系統の色であり（当時の分類で言えばアヲ系統）、「現在の黄色」にあてはまる色は「ヤマブキ色」であった。つまり、「黄ナル色」と「ヤマブキ色」とは別の色彩ということである。「ヤマブキ色」は、そののち、黄金色をもあらわすことばとなっていく。(7)

以上のことから、冒頭に挙げた

十市皇女の薨ぜし時、高市皇子尊の御作りたまひし歌三首

○山吹の（山振之）　立ちよそひたる　山清水　汲みに行かめど　道の知らなく　［二・158］

の山吹は、山吹の花を詠んだものであると考える。集成や全集の、山

「つつじ花　にほへる君」「紫の　にほへる妹」「山吹の　にほへる妹」と萬葉人の色彩感覚（田中みどり）

吹の花の色から「黄色」を引き出し、「山清水」を「泉」の意と解する解釈は間違いであって、この歌は新大系の言うように、

○秋山の　黄葉をしげみ　惑ひぬる　妹を求めむ　山道知らずも
［二・208］

と類似した慟哭の歌である、と結論づける。

四　黄色

日本の古代色は、アカ（明）・クロ（暗）・シロ（顕）・アヲ（漠）であった。アカに赤・黄を含む。「キ」という色彩名は萬葉集にはあらわれない。わずかに「クガネ・コガネ　黄金」の中にその痕跡が認められるだけである。しかしながら、「キ」の交替形である「ク」「コ」があるということは、この当時すでに「キ」色という概念・呼称が存在してはいたことの証である。ただ、一般には広く受け入れられていたわけではなく、とりわけ韻文の和歌の世界では古くからの「ニ」（埴土色）を踏襲していたのであろう。

日本人が色彩「黄色」を意識するのは、中国より文物を取り入れてからのことである。

日本書紀天武天皇十年八月に、

○丙戌、遣多禰嶋使人等、貢多禰嶋図。其国去京五千餘里、居筑紫南海中。切髪草裳、粳稲常豊、一薩両収。土毛支子・莞子及種々海物等多。
［日本書紀　全集③四一〇頁　天武天皇十年八年］

「支子　くちなし」があり、出雲国風土記に

○凡諸山野所在草木　麦門冬　独活　…蘖　槻
［出雲国風土記　意宇郡　一五二頁］

「蘖　きはだ」がある。これらは薬草である。「山梔子　さんしし」（くちなし）は利尿剤や染材として用いられる。蘖には健胃整腸の薬効があり、また防虫効果があるため古くから料紙や布を染めるのに使用された。

蘖の樹皮の外皮を剝ぐと鮮やかな黄色の内皮があらわれる。その内皮を用いて薬用・染色に用いる。これがすなわち「キハダ」である。

「蘖」「黄檗」は中国名で、日本では「きはだ」と言う。日本国語大辞典（第二版）には、

◇きはだ【黄蘖・黄膚】〔名〕（「蘖」は「肌・皮」の意。「きわだ」とも）
①ミカン科の落葉高木。…漢名、黄蘖。おうばく。…
②「きはだいろ（黄蘖色）の略。

とあるが、「蘖」はこの植物の中国名なのであって、この字に「肌・皮」の意はない。「樹皮（内皮・外皮）」を言う語に「木肌」があるから、「キハダ」という語はむしろこの「木肌」から来たものではないか、という推測も成り立つ。その色（鮮やかな黄色）を「きはだ色」と言い（これは植物の名に由来する「桃色　モモイロ」「朱華色　ハネズイロ」などと同じ造語法である）、しだいに「き」が「黄色」をあらわすことばになっていった、と考えられないであろうか。

「黄金　コガネ」の「コ」が「黄　キ」と音韻交替したものであると言われることと、「木　キ」が「木の葉　コノハ」の「コ」と音韻交替することとは似ている。ただし「黄金　クガネ」については不詳。

五　白色

萬葉集の中で、シロシ（白）は、わずかに4例のみで、

○吾がやどの　草の上白く　置く露の（草上白久　置露乃）　身も惜しからず　妹に逢はざれば　［四・785　相聞］

○朝な朝な　草の上白く　置く露の（草上白　置露乃）　消なば共にと　言ひし君はも　［十二・3041　寄物陳思］

○幸ひの　いかなる人か　黒髪の　白くなるまで（黒髪之　白成左右）　妹が声を聞く　［七・1411　挽歌］

○駒造る　土師の志婢麻呂　白くあれば（白久有者）　うべ欲しからむ　その黒き色を（其黒色乎）　［十六・3845　有由縁］

多くは、シロカネ（銀）・シロカミ（白髪）・シロキ（白酒）・シロタヘ（白妙）・シロタヘコロモ（白妙衣）・シロタヘノ（白妙）や、シラクモ（白雲）・シラナミ（白波）・シラユキ（白雪）・シラツユ（白露）、また、シラスゲ（白菅）・シラタヅ（白鶴）・シラタマ（白玉）・シラツツジ（白躑躅）・シラユフバナ（白木綿花）などなど、他の語に冠せて用いている。シロタヘ（白妙）は一語化している。

植物では、ツツジに、白躑躅が3首

○風早の　美保の浦廻の　白つつじ（白管仕）　見れどもさぶし　なき人思へば　［三・434　挽歌］

○たくひれの　鷺坂山の　白つつじ（白管自）　吾ににほはね　妹に示さむ　［九・1694　雑歌］

○をみなへし　佐紀野に生ふる　白つつじ（白管自）　知らぬこともて　言はれし吾が背　［十・1905　春の相聞］

丹躑躅が1首

○…竜田道の　岡辺の道に　丹つつじの（丹管土乃）　にほはむ時の　桜花　咲きなむ時に…　［六・971　雑歌］

ある。白躑躅と丹躑躅とを言い分けるのは、白と赤の二種類があったからである。ウメの花の場合、梅花歌卅二首の序に、

○…梅披鏡前之粉蘭薫珮後之香。…

のように梅の花が「白粉」で比喩されているのは、大伴旅人宅の梅が白梅であったことを物語り、また、後追和梅四首の中に、

○雪の色を　奪ひて咲ける　梅の花（宇梅能波奈）　今盛りなり　見む人もがも　［五・850　雑歌］

があり、梅の色を「雪の色を奪った」と表現することから、この歌の梅も白梅であることが見てとれる。そして、萬葉集中に「白梅」「紅梅」の書き分けがなくすべて「ウメ」としているのは、この頃まだ日本には白梅しかなかったからであると考える。

○引き攀じて　折らば散るべみ　梅の花（梅花）　袖に扱入れつ　染まば染むとも（染者雖染）　［八・1644　三野連石守］

の歌の梅は、染まるのであるから紅梅であろうという説が、一般にはいまだに流布しているのであるが、これが「染まる」のではない理由は、他にもある。第五句の「染まば染むとも」は、

○奈良山を　にほはす黄葉　手折り来て　今夜かざしつ　散らば散るとも（落者雖落）　［八・1588　三手代人名］

○白たへの　袖離れて寝る　ぬばたまの　今夜ははやも　明けば明けなむ（明者将開）[8]　［十一・2962　正述心緒］

の「散らば散るとも」「明けば明けなむ」と類似した表現で、「染みる

ならば染みてしまってもよい」という放任の気持ちを詠んだものである。「ソム（染）」は、萬葉集中に、

○韓人の　衣染むといふ（衣染云）　紫の　心に染みて　思ほゆるかも
［四・５６９　大典麻田連陽春］

など9例、「ウスゾメ（薄染）」1例、「ツキソメ（桃花褐）」1例、「テゾメ（手染）」1例、「コゾメ（深染）」3例、計１５例。「染める」という行為は、意図して色をつけるものである。一方、「シム（染）」（下二段動詞）は、

○託馬野に　生ふる紫草　衣に染め（衣染）　いまだ着ずして　色に出でにけり
［三・３９５　譬喩歌］

の1例。古くから「シメ」と訓みならわされているが、これは「ソメ」と訓んでも可。「シム」であれば、色を深くしみ込ませることとなる。次に、「シム（染）」（四段動詞）は、

○紅の　濃染の衣　色深く　染みにしかばか（染西鹿歯蚊）　忘れかねつる
［十一・２６２４　寄物陳思］

○なかなかに　人とあらずは　酒壷に　なりにてしかも　酒にしみなむ（酒二染嘗）
［三・３４３　大伴旅人］

など8例。２６２４歌に見られるように、「シム」は他者からの発動で、「しみ込む」「しみつく」意である。１６４４歌の「染まば染むとも」は、意図して色をつけたり、色をしみこませたりするのではない。梅の花の水分や雑色がしみ込んでしまってもよい、と言うのである。

したがって、

○引き攀じて　折らば散るべみ　梅の花（梅花）　袖に扱入れつ　染まば染むとも（染者雖染）
［八・１６４４　三野連石守］

の歌から、梅の花の色を推定することはできない。

最後に、〈一　ニホフ〉に掲げた、

○馬並めて　高の山辺を　白たへに　にほはしたるは（白妙丹　令艶色有者）梅の花かも
［十・１８５９　春の雑歌］

○たくひれの　鷺坂山の　白つつじ　われにに匂はね（白菅自　吾尓尼保波尼）　妹に示さむ
［九・１６９４　雑歌］

は、山の木々の間に咲き出た梅の花や躑躅の花の白さを詠んでいる。その色は、木々の緑から飛び出すような、真っ白い色である。〈二〉にあげた紫草の花もやはり白色であった。白雲や白雪も、その色の鮮やかさが浮き上がっている。「白たへに」と言うほどに、この時代の人々は「白」の美しさに心惹かれていた。

○大宮の　内にも外にも　光るまで　降れる白雪（比賀流麻泥　零流白雪）見れど飽かぬかも
［十七・３９２６　家持］

には、白から透明に至ろうとする雪が詠まれている。「雪のように白い」と言うとき、その白さには透明感が含まれていよう。

ところで、「白露」とは何か。露の色は透明である。今、雪の白さに透明感が含まれていると述べたが、つまりは、「シロ」という色は、《透明感》を含んだものなのである。筆者は以前に、シロとサラス（晒）が同根であることを述べた。[9] 水や雪や陽光に晒すこともまた、モノの透明感を増すことである。また、「夜が明け、東の空が白む」と言えば、空が明るさをもつことである。日本の古代色、アカ（明）・クロ（暗）・シロ（顕）・アヲ（漠）は、アカ・クロが明度を、

シロ・アヲが彩度をあらわすものに他ならない。「シロ」という色彩語が「顕」の義をもつことが、いまだこの時代には実感として保たれていたのである。[10]

〔注〕

(1)萬葉集中、モミチ・モミツと訓めるもの102例中に、「黄」表記79例、「赤」表記3例、「紅」表記1例。

(2)中国の二十四節気「霜降」の二候に「草木黄落」がある。また、白居易の詩「晩秋閑居」

　地僻門深少送迎
　披衣閑坐養幽情
　秋庭不掃攜藤杖
　閑蹋梧桐黄葉行

に「黄葉」の例がある。ただし、白居易には、

「送王十八歸山、寄題仙遊寺」

　曾於太白峯前住
　數到仙遊寺裏來
　黑水澄時潭底出
　白雲破處洞門開
　林間煖酒燒紅葉
　石上題詩掃緑苔
　惆悵舊遊無復到
　菊花時節羨君廻

のように「紅葉」の詩もある。(岩波『中国詩人選集　第十三巻　白居易　下』一九五八年)

(3)古事記には「予母都志許売　ヨモツシコメ」の表記があり、祝詞鎮火祭には「與美津枚坂　ヨミツヒラサカ」の表記があって、「ツ」でうける場合ヨミ・ヨモ両形があったようである。

(4)白居易の「長恨歌」中に、

　排空馭氣奔如電
　昇天入地求之遍
　上窮碧落下黄泉
　兩處茫茫皆不見

「黄泉」の用例がある。(岩波『中国詩人選集　第十三巻　白居易　下』一九五八年)

(5)枕草子三十四段には、

　○薄色の裏いと濃くて、上はすこしかへりたるならずは、濃き綾のつややかなるが、いと萎えぬを、頭こめに、引き着てぞ寝たる。香染の単衣、もしは黄生絹の単衣、紅の単衣袴の腰のいと長やかに、衣の下より引かれ着たるも、まだ解けながらなめり。外の方に、髪のうちたたなはりて、ゆるらかなるほど、長さおしはかられたるに、二藍の指貫に、あるかなきかの色したる香染の狩衣、白き生絹に、紅のとほすにこそはあらめ、つややかなる、霧にいたうしめりたるをぬぎ、鬢のすこしふくだみたれば、烏帽子の押し入れたるけしきもしどけなく見ゆ。

［枕草子　三十四段　全集八四頁］

とあり、「白き生絹」とさほど隔たらないところに「黄生絹」の用例があるのであるが、岩波日本古典文學大系『枕草子　紫式部日記』(岩瀬文庫蔵　柳原紀光筆本　を底本とする)の「もしは黄生絹のひとへ」注に、

　◇能因本にこの一句がない。黄生絹は黄色の生絹で、生絹は練らないままの絹。→補注四一　［枕草子　三六段　大系八一頁］

とあり、補注四一には、

　◇このあたり異文は次の通りである。

　能因本　かうそめのひとへくれなゐのこまやかなるすゝしのはかまのこし…

　堺本・前田本　ひとへはかうそめきすゝしなとにやくれなゐのはかまのこしの…

すなわち、能因本によれば、袴は「紅のこまやかなる生絹の

袴」と解され、堺本・前田本によれば、生絹には関係なく、「紅の袴」である。また、三巻本では単に「袴」となっている。

［枕草子　大系補注四一　三三九頁］

とあって、能因本には「黄生絹」の記述がないことが示されている。「黄なる生絹」ではなく「黄生絹」という表現になっていることも、疑問である。さらに補注四一は、この後につづけて、

◇いずれにしても「ひとへ」と袴とは全く関係がないとみなければならない。源氏物語、夕顔巻に「きなるすずしのひとへはかまながくきなしたるわらはの云々」とあるが、これも「黄なる生絹の単、袴長く着なしたる童」と解すべきで、「生絹の単袴」というものはあり得ない。

としている。これは上に掲げた源氏物語の用例の解釈にかかわる問題である。袴に生絹は用いない。

(6)また、黄系統の色に「梔子色」があるが、

○さま変はれる御すまゐ〈ひ〉に、御簾の端、御き丁も青鈍にて、隙〳〵よりほの見えたる薄鈍、梔子の袖口など、中〳〵なまめかしう奥ゆかしう思ひやられ給。

［源氏物語　賢木　①三八〇頁］

○空蟬の尼君に青鈍のを〈お〉りもの、いと心ばせあるを見つけ給て、御料にある梔子の御衣、聴し色なる添へ給て、おなじ日着給べき御消息聞こえめぐらし給。

［源氏物語　玉鬘　②三六九頁］

これは仏事用の衣である。

(7)「黄金」が「コガネ（クガネ）」で、「山吹　ヤマブキ」が「黄色」をさしたり「黄金色」をさしたりするところから、筆者は、「黄色　キイロ」は「金色　キンイロ」で、「キ」とは「金　漢音＝キン（キム）　呉音＝コン（コム）」を語源とするものではないか、と考える。

(8)新大系ほか、これを「明けなば明けなむ」と訓むものが多いが、校本萬葉集の訓「明けば明けなむ」に同意する。

(9)拙著『日本語のなりたち』（二〇〇三年　ミネルヴァ書房）八五頁～八六頁

(10)　春過ぎて夏来たるらし白たへの衣干したり天の香具山

［萬葉一・28］

この歌は、天皇御製歌である。仮に他者の作であったとしても、萬葉集成立当時、「天皇御製歌」と人々が認識していたことは動かない。何ゆえ、天皇が更衣の歌を詠むのか。その理由は「白」にある。

この歌にとって重要なのは、「白」という色である。一・79に「栲乃穂尓（たへのほに）夜の霜降り」があり、その全集注に「ホは特に目立つものを広くいう。ここは顕著な白さの形容。」と言う。また十三・3324に「雪穂（たへのほの）麻衣着れば」のように「雪」表記のものもある。当時の天皇の着衣は「白」であり、それは晒した「まっ白」なものであったであろう。そんな天皇の衣類が天の香具山を背景に干してあるのは、天皇の御代が穏やかに保たれていることの象徴ともなるものである。

持統天皇は、それを詠むことで、治世の安寧を寿いだのである。

（たなか　みどり　日本文学科）

二〇一九年十一月十一日受理